事例研究報告

高等部生徒に対する「日常生活の指導」中に手足を打ちつける行動を減らす取組

生徒の実態

【対象】
高等部生徒　知的障がい　自閉症

【日常生活に関する実態】
・授業中や教室間の移動中等，手で机を叩いたり，足で床を踏んだりする行動が頻繁にあり，家庭や外出先でも見られる。小学部高学年頃よりこの行動が現れ，叩く回数が増えてきた。
・息を大きく吸ったり，イヤーマフを大きく引っ張ったりして活動が止まることが多い。
・発語は「え」のみで，要求・報告全て一つの音声で行っている。

保護者の願い

・手足を打ちつけることなく，日常生活を送ることができるようになってほしい。

教員の願い

・手足を打ちつける行動が減り，スムーズに活動することができるようになってほしい。

アドバイザーからの助言①

①手足をあげたとき，次の活動に移るようプロンプトを出し，打ちつけることなく次の活動に移ることができれば称賛する。

・手足を打ちつける行為の意味は？
→主に活動の切り替えでは？
→他には，イライラやこだわり，怒りの感情等。

・連絡帳について
→回数も多く，毎日見られる。
→課題分析でつまづいている活動について調べる。

・指導について
→上記の方法で指導。40分間で手足を叩く行動が0になるようにする。

助言を受けての見直し①

①手足をあげたとき，次の活動に移るようプロンプトを出し，打ちつけることなく次の活動に移ることができれば称賛する。

<助言前>
・手足を打ちつける行動に対して，動作を制止したりしなかったりと指導方法が各教員によって異なっていた。
・担任2名のみが記録していた。

<助言後>
・記録の様式を一部変更した。「連絡帳」については課題分析で記録をとった。

・日常生活の指導の担当者間で記録方法の共通理解を図り，全員が記録を取ることができるようにした。また，週3日以上，担当している教員3名がメインで指導をし，2週間毎に，指導の有効性や今後の指導について話し合いを行った。

・朝の活動(着替え，鞄の荷物整理，連絡帳を書く，廊下のワイパーがけ)のうち，着替えの活動については男性教員2名が指導，他の3つの活動については担当者3名が助言に基づき，指導を行った。

指導の手続き①

指導方法

→手足をあげる動作が見られたら，打ちつけないよう支援しながら次の活動へのプロンプトを出し，次の活動に移るよう促す。打ちつけることなく次の活動に移ることができれば，そのことを言葉やハイタッチ等の方法で称賛する。

・着替えに関しては，担任が上記に基づき，9月12日から指導開始。連絡帳を書く活動について課題分析で記録を取った。

・９月２７日に担当者３名で話し合いをし，着替えのみ男性教員２名が引き続き上記の方法で指導し，その他の活動に関しても引き続き記録を取るようした。

記録方法①

・朝の活動(着替え，鞄の荷物出し，連絡帳を書く，廊下のワイパーがけの4活動)について記録した。

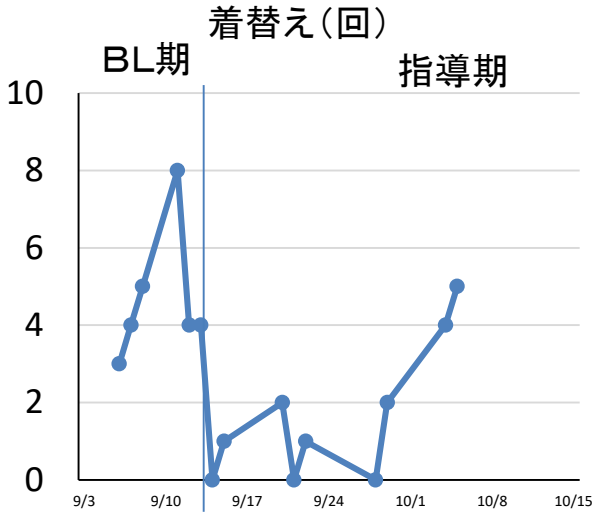
・体調，機嫌に関しては良・普・不の3段階で記録し，その他の行動や様子については記述した。

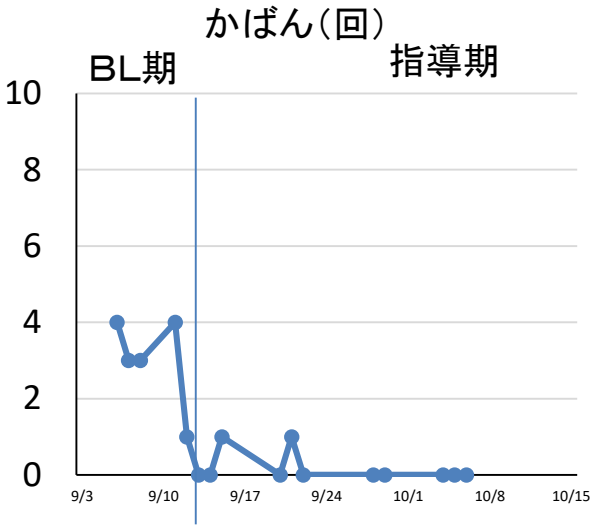
・着替え，鞄の荷物整理，廊下のワイパーがけに関しては，手と足で種類を分けてカウントした。

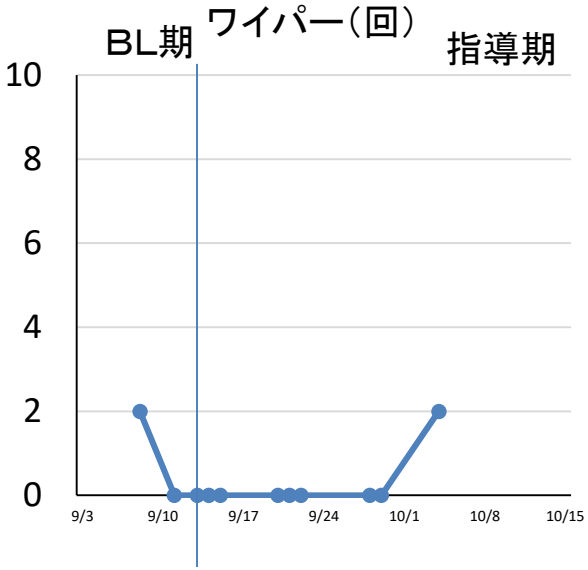
・連絡帳を書く活動に関しては担当者3名で話し合い，課題分析を行った。手足を打ちつける行動があった活動にはチェックを入れ，打ちつけなかった活動は空白にした。

記録①－１

・各活動毎の手足を打ちつけた回数の記録





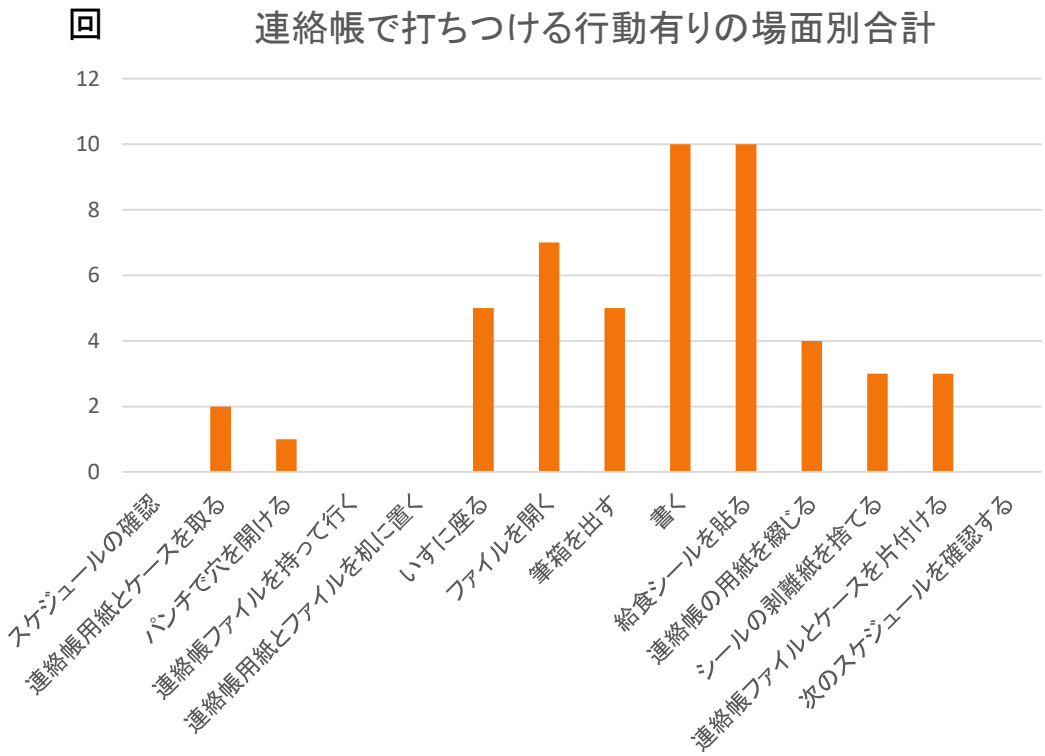


記録①－２

・「連絡帳を書く」活動の課題分析と記録
(9月3日～10月15日)

〇は打ちつける行動があった場面

	9月3日	9月4日	9月5日	9月6日	9月7日
スケジュールの確認					
連絡帳用紙とケースを取る					〇
パンチで穴を開ける					
連絡帳ファイルを持って行く					
連絡帳用紙とファイルを机に置く					
いすに座る			〇		
ファイルを開く				〇	〇
筆箱を出す				〇	
書く			〇		〇
給食シールを貼る			〇		
連絡帳の用紙を綴じる			〇		
シールの剥離紙を捨てる			〇		
連絡帳ファイルとケースを片付ける					〇
次のスケジュールを確認する					



指導の成果①

・着替え場面の指導当初は，打ちつける回数が全体的に減少したが，2週間後から増えた。

・打ちつける回数は増加したり，減少したりして成果につながらなかった。
・しかし，打ちつけた時の音の大きさが指導①以前と比較して小さくなってきたと担当者の意見が一致したため，一定の成果があると考えた。

アドバイザーからの助言②

②活動の途中で止まらないよう，プロンプトを出したり，
一人で活動できるよう支援をしたりする。

・手足を打ちつけることについて
→我慢することができてきたが，活動が止まってしばらくすると打ちつけてしまう。

・活動中，止まることについて
→次になにをすればよいかわからなくなると止まっている。
→息を吸ったり，体を揺らしたりすると活動が止まっているサイン。

・一人で活動することについて
→特定の教員からの支援を待つ状態から一人で活動できるようになる必要がある。

・今後の指導について
→止まることなく，一人で活動できるように支援する。
→過去に一人で活動することができていたので当時の担任に指導方法について聞く。

助言を受けての見直し②

②活動の途中で止まらないよう，プロンプトを出したり，一人で活動できるよう支援したりする。

<助言前>

・1回目の助言を受け，手足をあげたときに次の活動へのプロンプトを出し，打ちつけることなく次の活動に移るよう促していた。

<助言後>

- 元担任に当時の様子や指導方法について聴き取りし，担当者3名で話し合いを行った。小学部時代に，ほぼ一人でスケジュールを見ながら活動することができたとのことで，本人がどれくらい一人で活動することができているかについて課題分析で記録を取った。

- 本人の実態や元々スキルを獲得していることを考慮した上，「身体的ガイダンス」で支援することに決定し，指導開始。

- 指導後1週間程度で，指導の有効性や今後の指導方針について複数回話し合いを行った。

指導の手続き②

指導方法

- 活動が止まり3秒待っても動かないときに，身体的ガイダンスで次の活動を促す。

- 指導の順番は誰でも指導することができ，活動数も少ない「鞄の荷物整理」から始め，「連絡帳を書く」の順番で指導した。

- 課題分析をして記録を取り，止まりやすい活動をチェックし，止まって3秒待っても動かない時に身体的ガイダンスで促した。

記録方法②

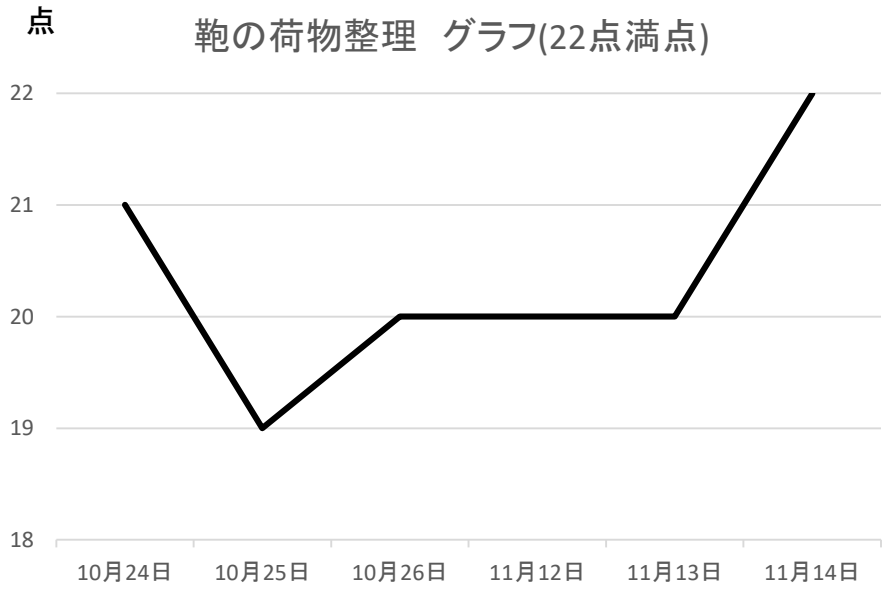
- 朝の活動(鞄の荷物出し，連絡帳を書くの２活動)を記録した。
- チェック式の課題分析記録表を作り，身体的ガイダンスをしたときは「１」，一人で活動できたときは「２」とし，記録を取った。１日毎に点数を全部足して合計点を出し，全得点の90％以上の点数を取ることができれば，一人で活動することができているということにした。
- １２月から１月までの朝の活動(４活動)の間に，手足を打ちつけた回数をカウントし，指導後の記録を取った。

記録②－１

・「鞄の荷物整理」の課題分析と記録
(10月24日～11月14日)

	10月24日	10月25日	10月26日
かばんを机に置く	2	2	2
水筒を持つ	2	2	2
かごに入れる	2	2	2
ふり返る	1	2	2
連絡帳を持つ	2	1	2
置く	2	2	2
ふり返る	2	2	2
(作業服を持つ)	1		
(入れる)	1		
(ふり返る)	1		
かばんを持つ	2	2	2
ロッカーに入れる	2	2	2
スケジュールに向きを変える	2	2	2
スケジュールの確認	2	していない	記録なし
合計	21	19	20
	21/22	19/20	20/20

単位は点



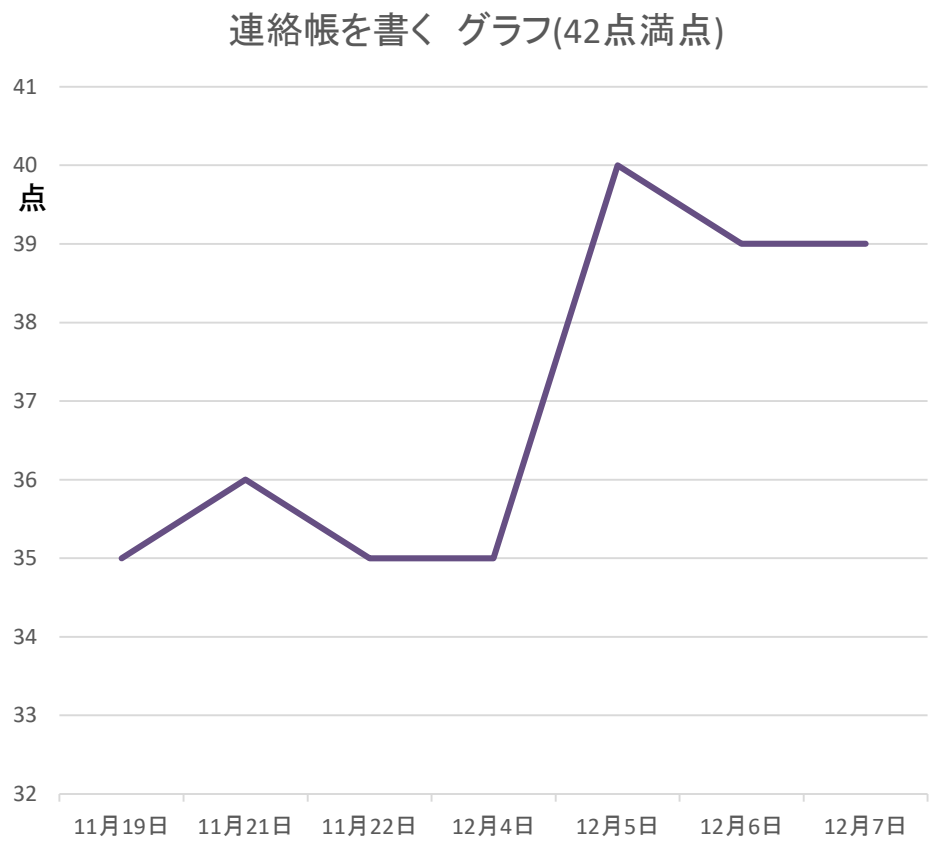
記録の取り方
身体的ガイダンスあり１点　自立２点

記録②－２

・「鞄の荷物整理」,「連絡帳を書く」の課題分析と記録
(11月19日～12月7日)

	11月19日	11月21日	11月22日
スケジュールの確認	1	1	1
用紙とケースを取る	2	2	2
パンチで穴を開ける	2	2	2
ファイルを持って行く	2	2	2
用紙とファイルを机に置く	2	2	2
いすに座る	2	1	2
ファイルを開く	2	2	2
リングを開ける	2	2	1
用紙を綴じる	1	1	2
リングを閉じる	2	2	2
筆箱を出す	2	2	1
鉛筆を出す	1	2	1
書く	1	2	1
筆箱にえんぴつを片付ける	2	2	2
ケースを開ける	2	2	2
給食シールを剥がす	1	1	1
給食シールを貼る	1	2	2
シールの剥離紙を捨てる	2	2	2
ケースを閉じる	2	2	2
ファイルとケースを片付ける	2	2	2
スケジュールの確認	1	1	1
合計	35	36	35
	35/42	36/42	35/42

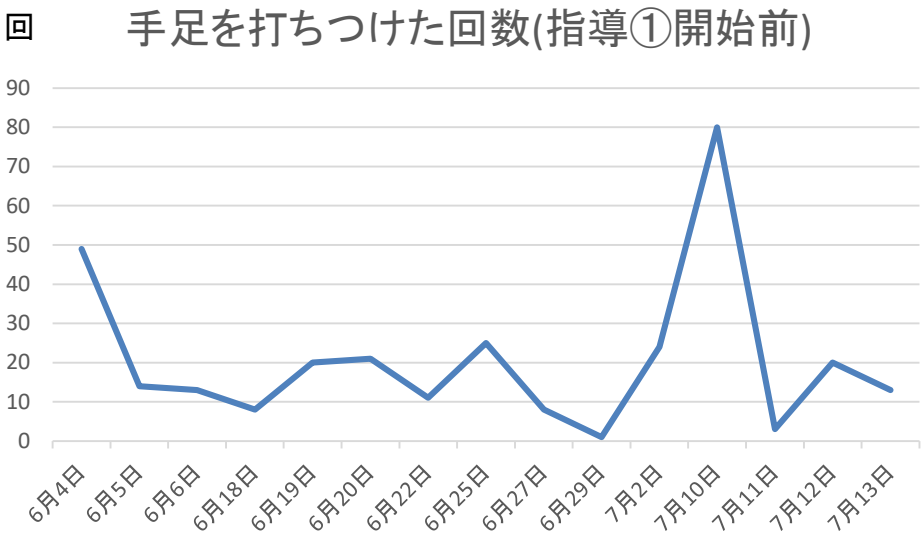
単位は点

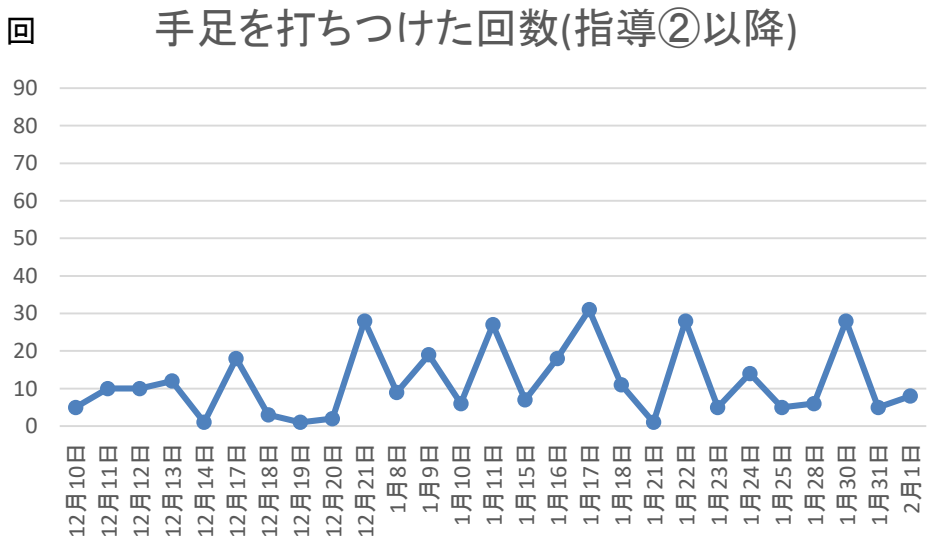


記録の取り方
身体的ガイダンスあり１点　自立２点

記録②－３

・指導①開始前と指導②以降の朝の活動中，手足を打ちつけた数の記録





・１日あたり平均20.6回

・(80回の日を除いた場合)
１日あたり平均15.3回

・１日あたり平均11.7回

指導の成果②

- 指導①以前と指導②以降の記録より叩く回数については少し減少が見られた。
  打ちつける回数が10回以下になる日も増えてきており，指導①以前では15日中４日であったが，指導②以降では27日中14日であった。

- 今回，身体的ガイダンスによって打ちつける行為が明らかに低減したとはいえない。
  しかし，指導者の印象としては対象生徒に対して，スムーズな行動へのつながりを形成することに有効であったと考えられる。

今後の指導

- 打ちつける前に次の行動を促す指導，身体的ガイダンスによる指導の効果は限定的だった。

- 感覚面でのアプローチが必要ではないか？
  →ロッキングをしたり，圧刺激を求めたりすることがある。今回の指導に加えて感覚面の指導も必要であると感じた。

- 好子が適切であったか？
  →言語称賛やハイタッチ等で称賛したが，本人にとってほめられているとわかる方法であったのか。好子の種類や出し方についてもっと検討する必要があったと感じた。

ここが成功のポイント

〇教員間の指導の方向性の統一

→話し合いを定期的に行うことで，指導の状況や方針等について確認することができた。

→指導の方向性が固まることで，教員間の指導のずれが生じにくく，子どもにとってもわかりやすく適切な指導が継続的にできた。